

記憶装置としての都市造形

表象都市 metamorphosis 広島—芸術実験プロジェクト2003—より

伊 東 敏 光

序

研究分担者伊東敏光は、「記憶装置としての都市造形」という視点から、都市広島の現在を歴史の痕跡をたどりながら調査し、またその歴史を象徴する建物を会場とした芸術展を、企画・開催した。

この芸術実験展は、本研究の代表者武藤三千夫をチーフディレクターとし、「絵画」、「彫刻」、「環境芸術」という三つの領域から構成された。そこで伊東は彫刻領域のディレクターとして、8名の彫刻家を招聘し、また自らも参加作家として、広島市内に残る被爆建物である旧日本銀行広島支店において実験的な作品展示を行った。

これは芸術家の感性とその造形力によって、都市広島に歴史を踏まえた新たな創造の具体的イメージをもたらそうとしたものであり、結果、被爆の事実を含む広島の歴史と現在が、会場となった旧日銀の空間と彫刻作品によってさまざまな形で表現された。

この研究の特徴は、制作と展示を実際におこなったことにより、空間と作品の持つ意味を体験出来るものとして提示したことにある。本報告書では、この実験展を中心に研究の成果を報告していくこととする。

背景

本研究を進めるにあたり、まず私が重要な課題としたのは、現在私が生活している広島市における「文化と環境」についてである。広島市は、1945年の原爆投下によって、それ以前の町並みはもとより、美術工芸品から書物にいたるすべてのものを失った。人類の歴史上でもこれほど広い地域で、しかも短時間で「文化」に関わるあらゆるものが失われた例は、広島、長崎だけである。

ここで現在の広島市の環境や文化を簡単に分析してみると、一見他の都市と大きな違いを感じることは無い。むしろ町並みや建築物のデザインにしても特徴的なものはあまりなく、日本の大都市のありふれた風景に見える。しかしよく見ると建築物のすべてが被爆以降のものであり、街路樹も移植したもののばかりで、被爆建物や被爆樹木として扱われているもの以外は、すべて戦後のものである。

さて、近年日本の都市について、「地方都市は、大小の違いこそあれどこも同じように見える。」とよく言われるが、確かにその土地の持つ特徴的な文化や伝統は、古い町並と共に失われつつあり、東京や大阪を小型化したような都市ばかりに成りつつある。

広島のような特異な歴史を持つ都市であってもそれは同じであり、他都市と比べ歴史的価値を持つ建造物が圧倒的に少ない広島市においても、数えるほどしかない戦前からの建

造物を、残していくことが未だ出来ないのである。確かにそれらの古い建物を保存活用するためには、新しく造り直す以上のコストがかかり、利便さ、活用時の生産性、防災対策などを考えれば、戦後の復興過程のなかで現在の機能が優先されたことは必然であったと納得できる。しかし現在の日本は、戦後間もない頃とは比較にならない経済力を持ったにもかかわらず、10に満たない広島の被爆建物さえ残す事が出来ない現状に、危惧を感じているのは私ばかりではあるまい。

彫刻作家である私は、このような状況を考える際、モノがそこに在ることの意味を強く感じる。文字や数値、写真等の媒体を通して伝わり残される情報は、それ自体は正確に伝わり変化せずに残るが、すべてが均質で等価な出来事として見えてしまう傾向がある。これに対して実際の建造物や遺構は時間と共に変化し、また見る側の姿勢や理解力の違いによって様々な捉え方をされるが、実際に見、触れた経験は、精神の抑揚をともなう不均一な記憶（忘れることと鮮烈に残ること）として残る。

彫刻制作の際、私が最も大切だと考えているのは、材料やモチーフ、また制作中の作品において「そこに在るモノといかに向き合うか。」ということである。そこに在るモノは、こちらの姿勢や状況の違いによって、今まで気付かなかった側面を向き合うたびに見せてくれる。

モノがそこに在るということは、その時点で我々が認識できることだけでなく、認識出来ないことも含めて存在するということである。当然のことながら彫刻制作においては、モノがそこに在ることと、モノの情報があることとは、全く違う意味を持つのである。

私は、本研究を始める以前の1995年頃から、本研究分担者前川義春助教授等と共に被爆建物での芸術展示を企画・開催し、広島での芸術活動を模索して来た。'95年には旧広島大学学校教育学部図書館で、'97年には旧宇品陸軍糧秣支廠倉庫で、'98年にはサントリー宮島工場において、「歴史的建造物と芸術の共振展」というタイトルの実験的芸術展を開催した。中でも'97年の旧宇品陸軍糧秣支廠倉庫での展示は、本実験展示に至る大きな動機となった。

展示会場である旧宇品陸軍糧秣支廠倉庫は、1910年（明治43年）に戦時における軍の糧秣物資を管理・輸送するために建てられたレンガ造りの堅牢な倉庫であった。被爆時は爆心地から4.6キロメートル離れていたこともあり、一部の損壊で免れ、その後も倉庫として利用されてきた。しかし老朽化が進み、またこの場所が道路用地となるため、我々の芸術展終了後取り壊しが決まっていた。

私は展示会の開催初日に備え数日間倉庫に詰めて、彫刻の仕上げと会場設営の作業をしながら、その空間が持つ独特の雰囲気や精神が揺り動かされるのを感じていた。厚さ60センチもあるレンガの壁は傷つき変色し、コンクリートの床には何度も修復された後があり、至る所汚れと傷だらけであるが、時間と歴史が残したこれらの痕跡は全体として調和し、美しい空間を創り出していた。

その空間に刺激された私の作業は、床にドロイングをしたり、彫刻の配置を変えてみたりと、予想外の展開をみせた。建物の傷や、かつての様子を知る人からの情報によって、過去にこの場所で起こったさまざまな出来事が思い浮かぶようで、場所と作品との関係について強く意識させられながらの作業となった。

芸術展が始まると、芸術愛好家だけでなく、被爆建物の研究者、また以前近所に住んでいてこのあたりを遊び場に使っていたという人や、終戦時にここで働いていた人までもが、遠方より訪れてくれた。彼等の目に我々の作品や音楽がどのように感じられたのか定かでないが、美術館や画廊での展示と違い、鑑賞する側にとっても作品と場所との関係は必然的に意識されていたように思う。

この倉庫も、壁の一部をモニュメントとして残した以外は取り壊され、道路用地となった。現在、広島市内に残る戦前からの建物で展覧会などが出来るだけの規模をもつものは、本研究における実験展の会場となった旧日本銀行広島支店を含め、数カ所だけとなっている。

実験展示

旧日本銀行広島支店について

本実験展示は、被爆建造物でもある旧日本銀行広島支店を会場として行った。

この建物は、1936年8月竣工。鉄筋コンクリート3階建・地下1階、のシンプルな古典様式の銀行建築で、当時、建築家の長野宇平治が技師長を務める日本銀行臨時建築部によって設計された。1945年の被爆時、爆心地から380メートルにあったが、堅牢な建物であったため1、2階の大破はまぬがれ、被爆当日は臨時病室として負傷者を収容した。被爆の翌々日には業務を開始し、その後1992年まで日本銀行広島支店として営業を続けた。閉鎖後は、市の中心部に残された被爆建物として保存活用に関する議論の象徴的存在となり、2000年7月日本銀行から広島市に無償貸与されてからは、建物内部も一般公開し、文化財として保存しながら有効活用する方法が検討されている。

テーマ；「時の器」

本研究の代表者であり、芸術実験展示のチーフディレクターでもある武藤三千夫は、今回の実験展示について、「隠喩」というキーワードを参加作家に提示した。これは、この実験展が核廃絶や平和運動のような直接的な目的を掲げたものではなく、芸術作品の持つ隠喩表現の豊かで強い力によって、「原爆、平和」といった記号化され、日常化された言葉の意味をもう一度その根源に引き戻し、広島本来の歴史や文化を把握し直そうという試みであることを示している。

「彫刻領域」ディレクターである私は、チーフディレクターの意思をふまえながら、さらに領域固有のテーマとして、「時の器」を提示した。私には、「すぐれた彫刻は、その形態や物質感によって独自の時間が表現されている。(内在している)」という、非常に感覚的ではあるが、経験的には確信を持っている評価基準がある。

多少感覚的な説明になるが、例えば私たちが、古代都市（エジプトやギリシャ等）を旅した時に感じる、日常の時間とは異なる時間感覚を思い浮かべていただきたい。また日本での例をあげれば、奈良を訪れ、法隆寺夢殿で救世観音のような優れた仏像彫刻に接した際にも、そこに独特の空気と時間が流れているように感じるだろう。それは古い時代の建築と彫刻が今もそのままに存在し、その時代の彫刻や建築に私たちが接することによって、現代との明らかな違いを確認出来るからであり、また同時にその時代から現在に至までの

時間の蓄積を、刻まれた痕跡（色や傷）によって、私たちが感じるからであろう。

このような非日常的な時間感覚は、なにも古いものだけに感じるわけではない。現代彫刻は、素材の特質を生かすことで新しい表現を獲得してきたという一面があるが、彫刻の素材としての「石や木」について考えてみても、石の歴史は我々人間の歴史よりも遥かに永いものであるし、「木」にしても成長段階での記憶が形態や年輪に確実に残されている。すぐれた彫刻家は、このような通常の生活の中では見逃しがちな素材に内在するさまざまな歴史と、そこから発生する固有の特質を見極め、自らの創造性を高めることによって新しい造形を創り出していく。

「彫刻領域」のディレクターとして私が表現しようとしたことは、旧日本銀行広島支店を上記で例えた古代都市、また石や木のような素材と同じようなものとして捉え、旧日銀に内在する歴史の痕跡に作家が触れることから、新たな造形、新たな表現を獲得すること。また残された建築物と新しい彫刻によって創りだされる空間そのものであった。

会場；旧日本銀行広島支店（広島市中区袋町5-21）

会期；2003年9月27日（土曜）～10月20日（月曜）

展示作品



村井進吾

《個体1》 Individual 1

2003

60×60×153cm

御影石 Granite

《個体2》 Individual 2

2003

60×60×153cm

御影石 Granite



松井紫朗

《Mask》

2003、シリコンラバー Silicon rubber





チャールズ・ウォーゼン

- | | |
|----------------------------|-------------------------|
| 《Sloop》
50×27×54cm | 《Nutcoco》
21×24×41cm |
| 《Mugmug》
16×19×32cm | 《Tass》
19×21×29cm |
| 《French Boy》
29×24×48cm | 《Erm》
22×18×48cm |
| 《Bowknod》
31×18×23cm | 《Grappo》
25×36×34cm |

2003

プラスチック、ボールペンインク Plastic, Ballpoint pen ink



伊東敏光

《一郎の滝》 Waterfall of Ichiro
2002、160×430×155cm
黒御影石、鉄に亜鉛メッキ Granite, Steel plated with zinc

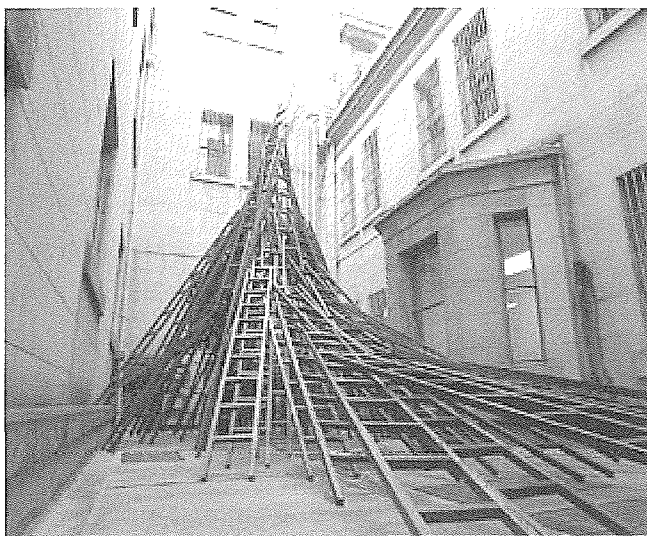


《水景と枇杷の木》 Waterscape and Loquat Tree
2003、170×500×213cm
黒御影石、鉄、銅 Granite, Steel, Copper



林武史

《桜、sakura、さくら》 Cherry blossoms
2003
450×360×27cm
御影石、鉛 Granite, Lead



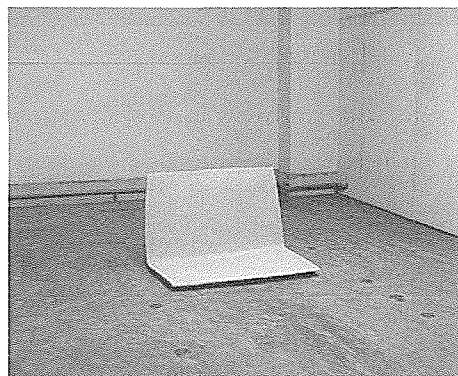
中瀬康志

《仮設一空》 temporary-the sky
2003
木、塗料、その他 Woods, Paint, Others

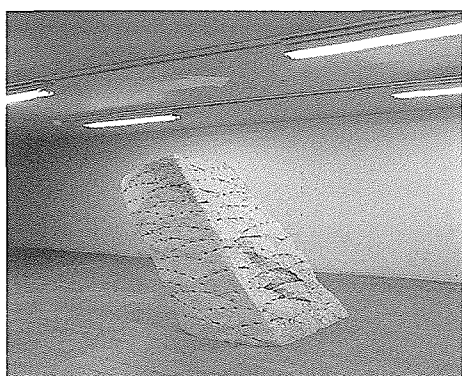


丸山富之

《作品 03-86》 Work 03-86
2003
147×20×56cm 砂岩 Sandstone



《作品 02-81》 Work 02-81
2002
99×62×61cm 砂岩 Sandstone

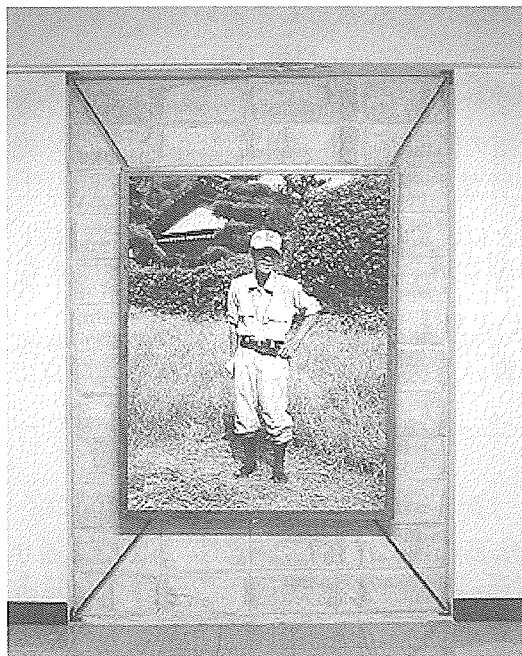


岡本敦生

《Crust-cocoon '03》
2003
110×200×185cm 白御影石 White granite

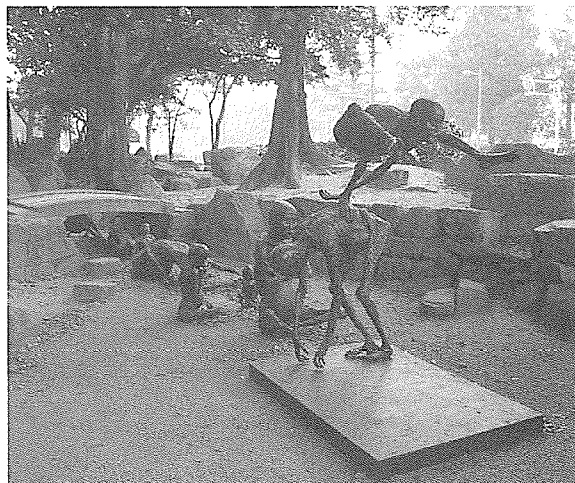


《Memorial Volume-Turtle》
2001-2003
65×45×120cm 白御影石 White granite



和田拓治郎

《名人芸》
a mastery performance — put a toe ring by the mowing —
2003
100×200cm
写真 PhotoGraph



《出世街道》 The highroad to success
2003
100×500×180cm
鉄 Iron



佐藤時啓

《光-Hiroshima》 Rays-Hiroshima
2003
レンズ、バルーン、その他
Lens, Baloon, The others

今回の実験展示では、美術家が都市「広島」を対象として捉え、実際の制作過程と展示を通して、広島の歴史や文化に新たな視点を与えてくれたように思う。しかし現時点ではそれは明確なものではなく、直接的な影響を広島市民に対して及ぼしたという訳ではない。また会場となった旧日本銀行広島支店についても、この建物が、原爆ドームや平和記念公園とは違うかたちで、広島の歴史と都市のイメージを象徴する場として今後益々重要な意味を持つことは明確になったと感じるが、保存活用の問題がこの実験展によって大きく進展したという訳でもない。

研究が一通り終了した現時点で確実に言えることは、このような実践的な研究は継続してこそ、その意味が社会性を持つということである。今後も調査・研究を続けながら、あらゆる機会に実践的な実験展示を実行していきたいと考えている。

最後に研究のまとめとして、本実験展の図録に書いた文章を添えて、本研究の現時点での着地点としたい。

「時の器」

1994年冬、広島市立大学の初めての入試準備で広島市内に滞在した私は、たまたま通りがかった旧日本銀行の前で突然、異質な圧力を感じた。後から考えれば広島を中心部には歴史を感じさせる古い建物がほとんどなく、同じようなビルばかりの中に旧日銀だけが古びた姿で在るために、懐古状態に陥ったのだらうと推測できるが、あの時、私が感じた圧力はそのためだけではなかったと思う。

ある出来事をさまざまな情報として知覚すること、それに対して自分なりのスタンスで向き合うこと、そしてそれがいつの間にか意識の表層から消えていくこと。そんなことを繰り返しながら私達は日々を過ごし、自己を構築している。あの異質な圧力は、整理され次第に潜伏していった私の知覚が、旧日銀という歴史の痕跡に刺激され、無選択にそして突発的に表出したことによる波動のようなものだったのではないか。

私は芸術作品と向き合う際にも、幾度か旧日銀の時と似た感覚に襲われたことがある。今回彫刻領域において制作をお願いした作家は、以前私にそのような感覚を与えてくれたことのある作品の作者である。それはたとえば水で満たされた容器と空の容器との違いの様に、視覚的にはほとんど差がなくても確実に感じられるものである。

今回の旧日銀の内部空間における展示で、企画者として、あの異質な圧力を表現出来たとは思っていない。ただ今は、ディレクターとしての力の無さを痛切に感じながらも、各作家の作品と展示空間が、広島における展覧会の一つのビジョンを示してくれたことに大きな希望を抱いている。

私のイメージする世界では、被爆建物である旧日本銀行広島支店は、特殊な空気で満たされている。その空間には、私達の歴史や精神が高密度で溶け込んでいて、創造力を持った人間がその空気に接すると、混沌とした空間の中から物事の本質的な事象が非作為に表出してくる。そこでは旧日銀が芸術行為によって、すでに創造的表象を獲得し、私達人間にとっての「時の器」、「精神の器」として存在している。